

業種別ゼミ概要 (WEB掲示用)

2026年 3月 4日

授業科目名	如水会寄附講義「如水ゼミ」		
ゼミ名	報道・出版 ～何を考え、どう伝えるのか～ 時代や世相と向き合う～		
講師幹事名	共同通信社 永井利治	大学教員	全学共通教育センター長 南 裕子
学期	R8(2026)年 春夏・秋冬	開講時間	水曜 4～5時限

【授業の目的・到達目標】

21世紀も最初の四半世紀が終わり、大きな社会変容が起きている。インターネットをはじめとする情報ツールが多様化し、自分の意志を容易に発信できる環境が生まれている。新聞、出版、ラジオ、テレビといった大衆（マス）を対象にしたメディアが支えてきた社会から、個人が直接発信する大量の情報を自ら取捨選択する社会に変わりつつある。だがSNSなどにはフェイクニュースのような偽情報や、人々の心身に打撃を与え人間の尊厳を損なうような情報もあふれている。

マスメディアが果たしている機能や功罪を考えるを通じ、現代社会に必要なメディアリテラシーを学ぶことを今年のゼミの目標にしたい。新聞やテレビのニュースがどう取材され編集されるのか。出版社はどのように雑誌や書籍の企画を立案し、読者の期待に応えようとしているのか。マスメディアとSNSはどちらがより信頼できる存在なのだろうか。新聞・出版社はビジネスの将来像をどう描いているのか。現代の情報社会が抱える問題点を洗い出し、それを克服する道を考える時間にしたい。

【上記目的・目標達成方法】

開講日のゼミでは、マスメディアの役割や現在のビジネスモデルを概観する。同時にSNSが世論形成に果たす影響や各地の選挙で巻き起こしている旋風の実態を説明し、マスメディアとの対立や補完についても考える。現実の取材や企画執筆を知るためのワークショップも実施する。2回目以降は各講師が自分の体験や知見に基づいて、マスメディアの仕事や課題について講義する。会社見学やメディアの実務担当者らと意見交換する時間を設けることも検討している。

【授業の内容と計画】

月日	講師名	卒年 学部	社名・役職 (※役職は作成日現在)	講義内容
4月22日 @国立	永井 利治	昭61社	共同通信社 特別論説委員	私たちが暮らす社会で起きている出来事を人々はどのような経路で知ることなのか。報道機関はどのような価値観に依拠してニュースを伝えているのか。こうした問題意識を持ちながら、SNSとマスメディアがもたらす双方向の作用や葛藤を考察します。ニュースを掘り起こす最先端の手法を紹介し、社会事象を多角的に分析するためのワークショップも検討しています。
5月13日 @読売新聞 東京本社 (予定)	石橋 大祐	平11社	読売新聞 教育ネットワーク事務局	1. 概論 新聞ができるまで 2. 伝える、伝わるあなたのニュース SNS時代のニュース価値判断とは キャリア形成に活かす情報活用術 新聞で本当に就勝できてしまった件 3. 新聞社×SDGs×教育 ～じぶんごとから はじめよう～
5月27日 @国立	大場 あい	平9社	毎日新聞社 宇都宮支局 支局長	1. 記者の1日、デスクの1日 2. 一般紙が科学・環境を報じる意義 ～くらし科学環境部での経験から 3. 紙、ニュースサイト「二刀流」の模索 4. 地方機関勤務はムダ？ 5. レガシーメディアで働く意義はあるか

業種別ゼミ概要 (WEB掲示用)

6月3日 @時事通信 本社	織田 晋太郎	平 18 社 令 8 修法 ビジネスロー 専攻修了見込	時事通信社 編集委員	2017 年から 21 年にかけてトランプ政権下の米シリコンバレーに駐在し、IT 企業を取材した経験から、SNS プラットフォームが民主主義や言論空間に与えてきた影響を振り返り、昨年の大統領選でのトランプ大統領の返り咲きの背景にある情報空間をめぐる議論を概観する。参加者の都合次第で、時事通信本社を見学することも検討 一、選挙介入と SNS 一、言論の自由か、「検閲」か 一、テクノ封建制 一、SNS プラットフォームの行方
6月10日 @国立	藤下 超	昭 62 社	日本放送協会 メディア総局特別主幹 兼解説委員	報道を中心にテレビの仕事全般について紹介するとともに、激変するメディア環境の中で、公共メディアであるテレビがどのような将来像を描いているのか、海外の事例も紹介しながら概説する。 ▼テレビと新聞 働き方は、どう違うのか ▼海外特派員の仕事 現場から伝えることの意味 ▼テレビを取り巻く環境の変化 NHK ONE の挑戦 ▼公共メディアの役割と課題 世界の視点から
6月17日 @国立	藤田 和明	平 3 法	日本経済新聞社 上級論説委員兼編集委員	1. 経済ニュースとは。世界を知る・自分を知る 2. 会社はいきもの。「いい会社」って何だろう 3. マーケット報道の意義。コロナ禍を先読みした 4. 株価が映すもの。会社・景気・マネー・政治 etc 5. 「投資」って何だ。そして自分の未来を考える
7月1日 @講談社 (予定)	米沢	平 17 社 平 19 社院	講談社 週刊現代編集部 副編集長	・なぜ編集者は「一流シェフ」であるのか？ 狩猟採集から味付けまで ・なぜ記者と編集者はこんなに違うのか？ 週刊現代のヒット企画、現代ビジネスのPVの稼ぎ方から、『未来の年表』シリーズが売り上げ100万部超となった秘密まで ・実践編: 話題となる雑誌企画、大ヒット本企画を練ろう ——雑誌はタイトルが9割。本の表紙は顔面、ストーリーは身体である ・「確信犯」「敷居が高い」「なしくずし」の意味は？——出版社の良心「校閲」の現場から

【テキスト・参考文献】

- 参考文献は当日のゼミで紹介します。資料も配布します。
- 6/17 藤田講師：日本経済新聞のWEB (www.nikkei.com) など、経済ニュースに日ごろから触れ、関心を持つことを心がけてくれればと思います。
- 7/1 米沢講師：雑誌「週刊現代」、あるいは『未来の年表』シリーズ（講談社現代新書）のうち1冊を事前に読んで、編集者がそこにどう関わっているかを考えてください。

【受講生に対するメッセージ、希望】

- マスコミで働きたいと考える人はもちろん、メディアの実情を知り情報に対するリテラシーを高めようとする学生の参加を期待している。
- 経済ニュースが学生のみなさん一人ひとりの今や将来に深く密接に関わっていることを発見してもらいたいと思います。

業種別ゼミ概要 (WEB掲示用)

<過去の受講生の声>

- マスコミ業界の会社の構造や、来たるインターネット時代・AI時代に新聞社がどのようにして自らのジャーナリズム性を活かすべきかなどについて知見を深められ、参考になりました。また、実際に特集記事を考えるワークショップでは、トピックの意義や記事を作る際の技術的な注意点について、実践的なアドバイスを頂くことができ、大きな糧となりました。
- 新聞社に対するイメージが大きく変わった授業だった。これまでは新聞社が社員に求めるのは情報をまとめたり分かりやすくしたりする文章構成能力だと思っていたが、今回の学外ゼミで、新聞社といっても様々な職種があることを知り、また密着取材や取材を通じて育まれた人間関係についてのエピソードを聞いて、根気強さや誠実さ、何よりも「面白いこと」に対するセンサーが新聞記者には必要なのだということを学ぶことが出来たのでとても有意義な時間だった。
- 新聞社の本社を訪問し、新聞が作られる現場を見学したことは、如水ゼミならではの貴重な経験でした。また、新聞記者として、ひいてはあらゆるキャリアにおいても重要な取捨選択という能力を、見出しの作成という実践を通して学べたことに大きな意義を感じました。
- これまでは「文系出身者が科学を仕事にする」ということについて、あまりリアリティをもって考えられなかったのですが、今回の講義を通じて報道という分野でそれが可能であること、また専門家でないからこそできることもあるのだと気づかされました。あくまでも一般読者の立場に立ちつつ、専門知識をもって取材活動を進めることは難しいと思う一方で、学び続けることがいかに大切であるのかを強く感じました。
- トランプ現象によってアメリカ社会の分断が顕在化された時期のアメリカがどのような状況だったのか、特派員の経験からお話して下さってとても勉強になりました。アテンション争奪戦においてレガシーメディアが生き残るためにはどうすればいいのか、答えは簡単には見つかりませんが、「画にならないものもニュースにできる」という文字メディアにしかない強みは、今後の新聞ジャーナリズムを考えていくうえで重要な点ではないかと思いました。
- 「ゼミ生の関心ある経済ニュース」からゼミが始まったが、その後の説明でもそこで話の出たニュースに関連付けて話して下さり、経済にあまり明るくない自分でもとても興味を持てる内容だった。日経平均の動向を予想する取り組みでは学生によって注目する要因が異なり、社会、国際/国内政治、金融、、など様々な要因が経済に関連することを実感した。これは同時に、経済の動きを見ることで世の中の様々な側面を読み取ることができるということだと感じた。
- これまでの如水ゼミでは新聞社や通信社について学んできたが、今回は出版社ということで、新聞社と出版社の違いがよく分かる回だった。1番の違いだと思ったのは、新聞社は「なにを」伝えるかを重視しているのに対して、出版社は「どのように」伝えるかを重視しているということだ。新聞社は記事のネタ探しや取材に力を入れていたが、出版社では本を手にとってもらうためにさまざまな工夫を凝らしていることを知った。